

# 琉球大学学術リポジトリ

## 支持的風土のある学級づくり — 『他者』と関わることからのアプローチ—

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山城, 太智 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002017972">https://doi.org/10.24564/0002017972</a>

## 支持的風土のある学級づくり

— 『他者』と関わることからのアプローチ —

How to Develop a Supportive Homeroom:  
Approached from the Perspective of How Students Interact with Others

山城 太智

Taichi YAMASHIRO

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・沖縄市立美原小学校

### 1. テーマ設定理由

現職教師として良い学級をつくっていくことを目標にこれまで取り組んできた。だが現実には簡単にはいかない。授業を参観すると、児童が教師と共に生き生きしている学級もあれば、授業中にもかかわらず離席や授業と関係ない話声が聞こえる学級もあり、その学級では教師が困っている姿を見かける。学校という集団の中で、児童同士をどう関わらせ解決していけばよいのかと悩み、同僚からも相談を持ちかけられたことも多々ある。その際にいつも、良い学級とは何なのか自問自答している。

「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」（令和2年3月）では、学びの質を高める授業改善・学校改善の考え方として、『支持的風土づくりの4つのポイント（安心、所属、承認、自立）を念頭においた取り組み』を重要な視点として位置づけている。沖縄県では、夢・にぬふぁ星プランⅡ補完版である『確かな学力向上』支援プラン（平成21年1月）にて支持的風土と自尊感情という言葉が初めて記載された。これは、平成19年度から始まった全国学力・学習状況調査の課題から、自尊感情を高める手立てとして支持的風土のある学級経営が打ち出されたものである。そして自尊感情は平成28年より自己肯定感という文言に変わり、一人ひとりの自己肯定感を高めるために学校・学級という集団の中で支持的風土を醸成することが今日の課題といわれている（図1）。

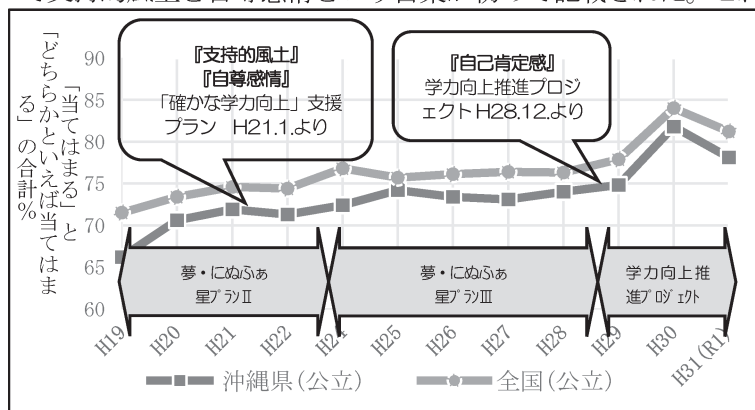


図1. 全国学力・学習状況調査の児童質問紙による自己肯定感の推移と県の対策

竹内(2016)は、「ケアは他者に同情して、他者を我が物とすること、つまり『他者を我が物とする』ことではない。それは、他者の他者性を尊敬し、他者の他者性に限りなく接近し、他者の呼びかけに応答することである」と述べていることから、筆者は学級経営において、そのケアすることが支持的風土の醸成に繋がっていると捉えた。さらにこれまでは、児童からみた友達や先生のことを『他者』としていたが、佐伯(1995)は、学び手が学校の教育で初めて関わる教材や教具も『見知らぬ他者』のように、どう対処していけばよいかわからないもの」と捉えた。したがって学校で初めて学ぶすべての『ヒト・モノ・コト』も『他者』であり、学校の友達や先生だけでなく教材や教具・行事、授業で関わる大人なども含めた出会いが『他者』との出会いとなると考え直した。

そこで上記で示した理論を関連させ、『他者』を学級経営と授業でつなげたアプローチから支持的風土を醸成することができないかと考え、今回のテーマを設定した。

## 2. 研究の目的

本研究では、小学校の学級経営において、支持的風土のある学級を醸成するために、『他者』と関わることを意識したアプローチから実践し検証する。

## 3. 支持的風土とは

### (1) 自己肯定感と自己有用感の関係

支持的風土に関して沖縄県教育委員会『「問い」が生まれる授業サポートガイド』（令和3年3月）では、「互いに認め合い、支え合う風土の醸成」と書かれている。また「不登校児童生徒への支援の手引き」（令和2年3月）では、不登校出現率が低く学力が良好な県との違いのひとつに自己肯定感を挙げ、その未然防止の対策として『支持的風土をつくる学級・学校経営』を重視するとしている。関連する国立教育研究所『生活指導リーフ』（平成27年3月）の内容もあわせて、図2のように整理すると、支持的風土を醸成していく中で児童の中の自己有用感を高め、自己肯定感を獲得させていくことが大切だと考えた。

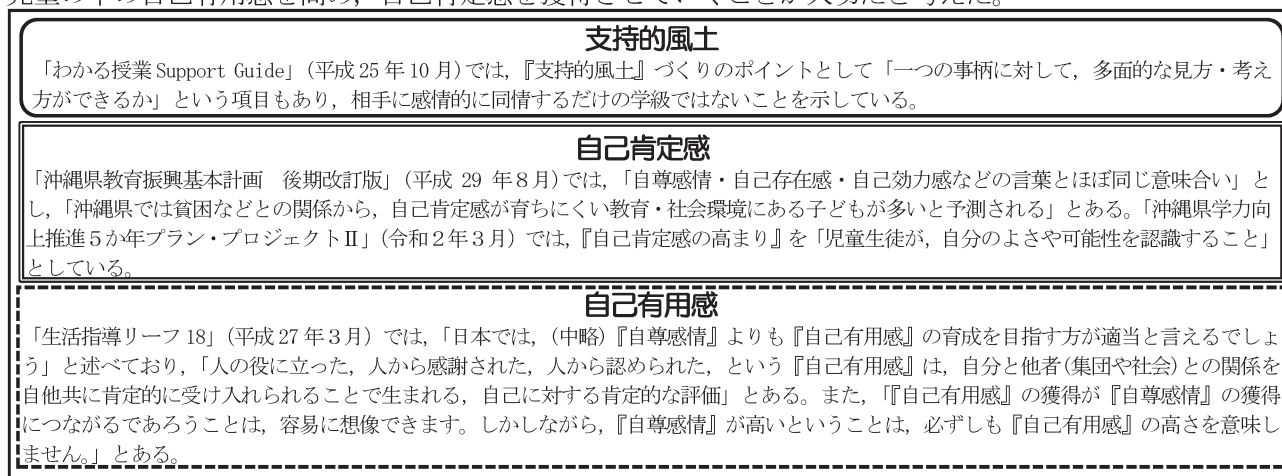


図2. 文献による支持的風土、自己有用感、自己肯定感

### (2) 『他者』と関わることを生かす地域教材の実践

『他者』と関わることが多い教材として、課題と思われる児童を指導していく中で地域教材を活用した実践を行った中野(2017)や、地域教材の持つ良さについて秋田(2000)が取り上げ、生活や集団を見つめている。また沖縄県でも、児童の問いから学びを発展させた総合的な学習の時間の実践を行った宮城(2001)や、地域の課題に目を向け学習していくことで自分たちの存在を肯定していく姿を明らかにした『沖縄八重山学びのゆいまーる研究会』の実践(2018)があり、自己肯定感を高める成果を上げている。

地域教材を実践することで、友だちや地域の人々、歴史や文化などの初めて出会う『他者』と関わる機会が増える。また、児童に学力差があったとしても、身近で関わりやすいという利点がある。したがって地域教材を活用するということは、児童にとって学びやすく、支持的風土が醸成しやすい環境をつくることにもなる。

## 4. 研究の方法

- (1) 実習校にて地域の教材を活用した授業を実践し、児童の地域に対する意識の変化をアンケートから調べる。(令和2年9月、令和3年1月)
- (2) 8市町村の先生方14名に聞き取り調査を実施し、地域の教材に対する分析を行う。  
(令和2年8月～11月)
- (3) 実習校にて他者との関わりを意識した教育活動を実施し、発言や授業のふりかえり、日記などの記述やアンケートから児童の変容をみとり、まとめる。(令和3年4月～12月)

## 5. 研究の内容

### (1) 初年度の実習校での実践

初年度は2校で2週間ずつの短期実習であるので、『他者』との関わりについて考える授業が多く、学校の実態や授業のスピードに比較的左右されない「特別な教科道德」で実践した。9月の実習では道德の内容項目『伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度』に絞り、一回目は道德の教科書から、二回目は県版の道德の副読本を活用した。さらに1月の実習では内容項目を絞らず、地域教材を意識し、一回目はオリジナル教材を作成、二回目は県版の道德の副読本を活用して行った。

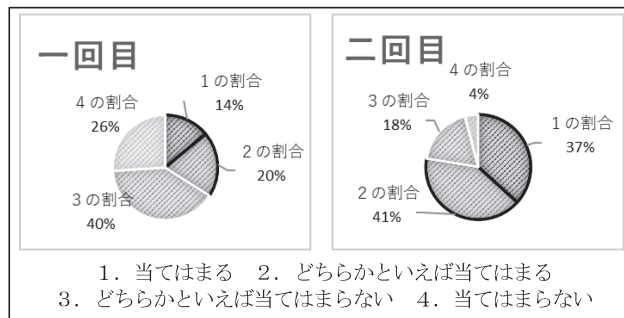


図3. 9月の実習校(6年)における「地域の行事に参加しようと思うようになりましたか?」の質問に対する児童の変容

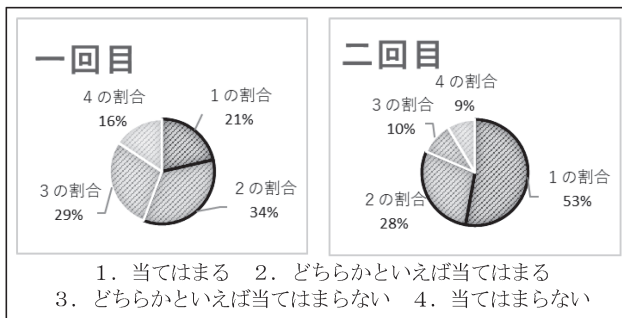


図4. 1月の実習校(4年)における「地域の行事に参加しようと思うようになりましたか?」の質問に対する児童の変容

いずれの実習においても、図3、図4のように地域に対する意識は高まった。特に1月に行った実習では、4年生ということもあり社会科で沖縄県の学習を行っているということ、実習校のある市町村独自の教材を行った後ということもあって、一回目の調査からでも半数以上の児童が1、2と答え、意識が高い結果になっている(図4)。また授業の中でも、学校のある地域の名所や特産物を取り上げて半数以上の児童が知っていた。地域のことを継続して取り上げることで児童の地域に対する意識は高まることがわかった。

### (2) 沖縄で地域教材を活用し実践した教師からの聞き取り調査

池内・岡本(2019)によると、支持的風土に関連するキーワード(「信頼関係」、「人間関係」、「存在感」など)の抽出とその出現回数を調査した結果、関連キーワードの出現回数の多い教科は「特別な教科道德」と「特別活動」であった。また、一般的に『他者』を意識し、地域教材の活用が多く実施されている教科として「社会科」「総合的な学習の時間」が挙げられる。その教科を中心に、文献や沖縄県立総合教育センターの実践報告などから、地域教材を活用した実践をされている先生方を対象に聞き取り調査を実施し、地域教材を活用したことで「㊦自己肯定感の高まりなどの変容が児童個々に見られたか」、「㊧学級の支持的風土の醸成につながる変容が見られたか」に対する返答をまとめた(表1)。

㊦に関しては全員があると答え、地域教材を活用することで地域を再認識し興味を持ち、結果として自己肯定感に結びついたと話した。㊧に関しては、△の5人は、児童が積極的に学習に参加する手立てと考え、支持的風土の学級づくりという視点ではなかったと答えた。○の1人は、学級経営として意識していなかったが、地域教材を実践していくうちに児童の表情が変わり、学級全体が生き生き活動し始めたと言う。それは地域教材を学ぶことで地域が好きになり、児童自身の居心地の良い居場所となり、「心に安心感が生まれたからではないだろうか」と児童の様子から学級を見直したと答えた。今でも伝統芸能を続け、地域に戻って活躍している教え子も多いと言う。◎の8人は、実践しながらも、学級全体が支持的風土のある学級に変容していくことを構想し実践した。したがって、どう地域教材を活用し実践していこうかを考え、児童の個々の自己肯定感の高まりだけでなく、学級集団としての支持的風土を醸成する相乗効果を期待していたと答えた。

聞き取り調査の結果から、単に地域教材を活用すれば支持的風土が生まれるのではなく、教師がどういう意図をもって実践を構想し取り組んだのかと関係している。授業を豊かなものにする視点だけでなく、児童同士の関わりや地域教材で関わる人をつなげる『他者』に対する意識も持って取り組んでいく視点が生活や集団を見つめるには重要であり、その視点が支持的風土のある学級づくりへとつながるのではないだろうか。

表 1. インタビューの結果 ※教員年数は令和2年度時点の数値である

校種 (教員年数)	実践教科	⑦地域教材→ 個に変容	⑧地域教材→ 集団に変容	⑨に関するコメント
小(11)	道徳	◎	△	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正直ない。なにかしらはあるんだとは思うんだけど。</li> <li>・学級経営と結びつくとは思うけど、どれくらい関わっているのかはまだわからない。</li> <li>・地域教材をとり上げたから子供たちが良くなったということを目的としていない部分もある。</li> <li>・変容はあるが、グループ活動などで活動することが多いので、地域素材や地域教材を扱ったからということではない。</li> </ul>
小(15)	社会、総合	◎	△	
小(18)	社会、総合、特別活動(学芸的行事)	◎	△	
小(19)	国語、総合、特別活動(学芸的行事)	◎	△	
小(30)	社会、総合	◎	△	
小(30)	国語、総合、特別活動(クラブ活動、学芸的行事)	◎	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・データを取っているわけではないが、子供達も生き生きしてくる。いろんな安心感だとか、そういう見えない心の部分にも働きかけられていそう。</li> <li>・学習に意欲的に取り組むようになった。</li> <li>・身近な地域という共通の土台が揃っているので、子供達が意見を言いやすくなり参加できるようになった。</li> <li>・学びに向かう姿勢が整ってくる。</li> <li>・物怖じせず他者と関わり合えるようになった。</li> <li>・男女の仲が良くなり、放課後も一緒に遊ぶようになった。</li> <li>・生き物をかわいがったり、大切にしたりする心が芽生えてきた。</li> <li>・ボランティア活動を積極的に行うようになった。</li> <li>・より良いものを作り合うための意見のぶつかり合いはあっても、自分のわがままと言うかやりたい事のぶつかり合いは減っていった。</li> </ul>
小(19)	社会、総合、音楽、体育、特別活動(学芸的行事)	◎	◎	
小(20)	社会、総合、特別活動(学校行事)	◎	◎	
小(21)	社会、総合、道徳、特別活動(学芸的行事)	◎	◎	
小(23)	体育、総合	◎	◎	
小(24)	社会、総合、特別活動(学校行事、学芸的行事)	◎	◎	
中(25)	国語、道徳	◎	◎	
小(31)	社会、総合、特別活動、道徳、PTA活動	◎	◎	
小(35)	社会、総合、PTA行事、修学旅行	◎	◎	

### (3) 二年次の実習校での実践

#### ① 研究の対象及び実施期間

公立小学校5学年児童30名(男子14名、女子16名)を対象とする。実施期間は、2021年4月から12月。

#### ② 学級の実態

5月初めのASSESS(学校適応感尺度)において、要学習支援領域にいる児童が5名、「回答に矛盾や防衛的反応が見られ、結果が正確でない可能性がある」という結果の児童が1名(A児)いた。他の児童からA児が「たたいてくる」という訴えや、叩かれて泣いている児童が4月早々から多数でできた。A児は、嫌なことがあるとすぐにかつとなって叩く、ふざけ過ぎて「いつの間にか手が出てしまう」と話していた。「なぜそういうことをするのか」と聞くと、顔を赤らめ興奮した状態で「どうせ自分だけ悪いんだろ」「おれはバカだから」など自暴自棄になる発言をし、反抗的な態度をとる。そこでそのA児を中心にした学級経営を行うこととした。

#### ③ 教育活動の実践

大和久・丹野(2014)は、班づくりとは「子どもの居場所づくりと出番づくりを通して、個人と他者との関係、集団と個人との関係、あり方を学ぶものだ」としており、筆者は『他者』との関わりを意識した実践を行うにあたり集団づくりの視点として班を意識して実践することにした。また、地域教材の活用だけでなく児童の主体的な活動を促すために、児童からの要求や課題を取り入れた教育活動も実施していくことにした。

表2の教科やその他の教育活動の欄における取組で、各教科の年間教育計画で予定されている単元やその



課題研究最終報告

発展授業に関しては○、児童からの要求や課題から行った教育活動に関しては☆で表している。

表 2. 教育活動の実践とエピソード

	教科やその他の教育活動	エピソード
4月～6月 (児童同士の関わり重点期)	○『班づくり』(特活) 学習班と生活班のメンバー決め ☆『話し合い活動』(特活) A児に対する困り感からの話し合い ※エピソード①に記述	① 「達成できたのはみんなのおかげ」 A児が手を出すので、どうにかしてほしいと児童から不満が出てきた。私はA児の問題を学級の問題として考えていた。そこで話し合いをすることを提案した。みんながA児に対して困っていることを挙げてもらい、A児は守れそうなことを選び『みんなとの約束』とした。中でもみんなが一番困っている「手を出さないこと」を特に気を付ける約束とし、守れそうな日数を決めた。またA児もみんなへの約束を要望し、4つくらい約束を決めた。6月に目標が達成でき、「達成できたのはみんなのおかげ」とA児が話してくれたので、「みんなに『お礼の手紙』を書いてみたら」と提案すると、意欲的な反応を示し、翌日書いてきた。そして全員の前で発表し驚かせた。
	☆『みんな仲よし地球っ子』(総合) 校区の地域調べ ※エピソード②に記述	② 『ユイマール』な地域 小学校のある地域についての調べ学習を行った。何を調べたいのかわからない児童が多かったので、地域の特徴を気付かせるため遠足の徒歩移動を利用し、他の地域との違いを観察させた。調べたいことを出し合い、『住宅』『土地』『公園』に関することがテーマになった。図書館司書と連携して本を準備してもらい、児童はインターネットや図書室にある資料から調べていった。保護者や祖父母からインタビューしてきた児童もいた。どうまとめるかは児童と話し合っただけでクイズ形式にすることになった。そして他の学級にも見られるように、クイズは掲示することになった。発表の日、リーダーが不在であったA児のいる班が心配であったが、一番目に手を挙げて発表してくれた。発表会后、私たちの住んでいる地域は周りの集落に住んでいる人達の畑だったということから、昔も今もみんなが仲良く暮らして「助け合っている」地域だったのではないかとということでもまとめた。そして「助け合っている」ということを沖縄の方言で『ユイマール』と呼ぶことを教えた。ふりかえりから、「新たな疑問が出てきた」「昔のことを調べることが楽しくなった」という児童が多くいたので、次は児童からの疑問から調べ学習を行うことを計画にすることにした。
	○『話し合い活動』(特活) 学級目標づくり	③ 「それは面白そう。していいの」 学習班と生活班を同じメンバーで行っていた。しかしA児のいる班のリーダーから、「ずっと同じメンバーではきついで席替えをお願いしたい」と相談があった。そこで、その児童に席替えの提案をしてもらい、話し合いを行った。児童から様々な席替えの方法が出てきたがどうまとめたらいのか困っていた。私が「その方法を全部やってみたら、毎月一回できそうだね」とつぶやいたところから「それは面白そう。していいの」と話がすすみ、席替えの年間計画を学級会で話し合い完成した。その計画に沿って今も実施している。
7月～9月 (地域教材との関わり重点期)	☆『話し合い活動』(特活) A児の目標達成記念お楽しみ会の企画(お楽しみ会) ○『日常を十七音で』(国語) 発展授業として琉歌について ○『話し合い活動』(特活) あいさつ運動の取り組み ※エピソード④に記述	④ 「この回数達成できれば問題ないだろ」 児童会活動のあいさつ運動では当番の一週間前からあいさつの回数を目標として立てて初日があった。時間前からタスキをかけてあいさつ運動を始める児童の中にA児もいたが、時間になっても教室にいる児童や時間に間に合わない児童もいた。「なんで来なかったの」と参加しなかった児童への声が聞こえたが、「この回数達成できれば問題ないだろ」というような返答が聞こえた。A児や朝早くから来て参加している児童に影響が出そうであったため、「何のためにあいさつ運動をするのか」を、学級会を開いて考えてもらった。「あいさつの回数より、学校のために参加することが大事ではないのか」という話し合いの結果になり、翌日からは欠席している児童を除いた全員の児童が残りの4日間参加できた。個々のあいさつの目標回数も全員が大幅に達成できた。
	○『単位数あたりの大きさ②』(算数) 雷の音速の問題 ※エピソード⑤に記述	⑤ 学校周辺の地図を算数の授業に 校内研究の代表授業であったため先生方の参観も多く、児童の緊張感をほぐすために、授業開始前、『おちた、おちた』のレクをやってもらった。すぐに3名の児童が前に出てきた。その中にA児もおり、いつも学級を盛り上げてくれるメンバーの1人になっている。最初の問題で自力解決の後ペアにした。児童の考えの中から誤答を出し、なぜ違うのか考えさせ前に出て説明してもらった後、正しい答えを別の児童に前に出てきて説明してもらった。しかしそこで、「わからない」と言ってくれた児童がいた。その児童を理解させるため、黒板まで出てきて図を描いて説明する児童や、班を超えた教え合いのやり取りがあった。わからない児童に寄り添った説明が児童主導で行われた。またそのやり取りのおかげで、「よりわかるようになった」という授業後の感想もあった。次に、学校の地区の地図を用いて班で解く問題を行った。児童の身近な場所を問題に取り入れることで、実生活でも考えられそうな問題にしたかった。各班で考えた答えをロイロノートで映し発表した。「雷が光って1秒経って音が聞こえたら、郵便局くらいの距離の場所で雷が落ちるということがわかりやすかった」や「今度雷が光ったら、秒数を教えてみたい」というような授業後の感想があった。最後に、自主的に2人の児童がふりかえりを発表してくれたが、その中の1人は「わからない」と言ってくれた児童であった。授業後に全員のふりかえりを確認したところ、半数以上の児童のノートに、班のメンバーや発表してくれたメンバーの名前が書かれていた。発表してくれた2人も児童の個人名が出たふりかえりの内容だった。

<p>10月～12月（地域の人の関わり重点期）</p>	<p>☆『未来を支える食料生産』（社会） 発展授業として沖縄の米づくりについて</p> <p>○『班づくり』（特活） 2回目の班メンバー決めと係活動決め</p> <p>☆班の係り活動を譲れない2つの班に対する選挙（特活） ※エピソード⑥に記述</p>	<p>⑥ 「どうしても譲りたくない」 夏休み明けに新しい生活班決めを行った。班のメンバーが決まり、係を選ぼう話し合いになった。そこで、2つの班が1つの係で重なり、どの班がやるのか話し合っただけで決めてもらった。これまでならどちらかが譲るといふことが多かったが、今回はどちらも理由を出し合い譲れないと主張し合った。ではどうしようかとみんなで話し合っただけで答えが出なかった。そこで、「一週間ずつやってみて、みんなで選んだらどうか」という方法を私が提案した。2つの班とも了承し、二週間後、決定選挙をすることになった。係が決まった他の班と同様、係分担や仕事内容を決めて画用紙に書き掲示した。児童はその掲示物や一週間ずつの働きから、どちらの班にやってみようかを選んだ。二週間後の決定選挙でやってみよう班が決まった。敗れてしまった班は後腐れなく、新しい係活動をやっている。</p>
	<p>☆『話し合い活動』（特活） あいさつ運動目標達成記念お楽しみ会の企画と実施（十八番大会）</p> <p>☆『話し合い活動』（特活） ふざけすぎる児童に対する困り感からの話し合い</p> <p>☆『みんな仲良し地球っ子』（総合） 沖縄県の地域調べ ※エピソード⑦に記述</p> <p>○『みんな仲良し地球っ子』（総合） 外部講師を招き、『固有種』についての授業</p>	<p>⑦ インタビューを取り入れた沖縄の調べ学習 沖縄に関する調べ学習を行った。自分が知りたい沖縄のテーマを出し合い、『特産物』『沖縄戦』『郷土料理』『伝統芸能』『ヤンバル』『海』の6つに絞られた。その中から児童が調べたいテーマを選び、班をつくり4時間程度、インターネットを使い調べ学習を始めた。前回の地域の調べ学習ではできなかったインタビューを必ず行うことにし、その相手も児童で探した。インタビューをしたい人や見学したい施設が決まった際には、相手先に私が連絡し趣旨を説明して了承をもらい、日程の調整は児童が電話で行った。A児も日程を調整する電話担当になり、自分なりの言葉でお願いできた。最初に決めたお店に断られ別のお店を探した班もあった。インタビュー相手が二時間かかる場所に住んでいる方もいたが、児童の熱意が通じたのか来校してもらえた班もあった。全部の班がインタビューすることができた。壁新聞でまとめることを児童が当初から決めており、ロイロノートで記事をかき完成した。発表は4年生を招いて聞いてもらった。インタビューでお世話になった方々には、お礼の手紙を書いてプレゼントした。全員がインタビューして「良かった」と答え、「実際に聞かないとわからないこともあった」「インタビューしたからもっとわかった」「調べた班のメンバーとは今まで以上に仲良くなった」という感想があった。</p>
	<p>○『話し合い活動』（特活） 運動会のリレーのチーム決め、運動会リレーの学級スローガンとチームの目標決め ※エピソード⑧に記述</p> <p>☆『話し合い活動』（特活） 運動会の目標達成記念（プールお楽しみ会）</p>	<p>⑧ 自分たちで考えたメンバーで 運動会のリレーのチーム決めを話し合った。『タイムで均等に』という案ではなく、『自分たちで考えたメンバー』という案が採用された。男女で別れて2チームづくり、男女のチームそれぞれを1つにするところはみんなで確認しながら決めた。リーダー的な児童も「両チームに分かれるように相談して決めた」と児童の日記に書かれており、走順や並び方もスムーズに決まった。一回目の全体練習からチームで並ぶことができ、走順を間違えて混乱することが一度もなかった。チームのめあてや目標・個人の目標を決めたが、両チームとも、「協力してバトンを繋げる」「楽しく」という言葉で考えられていた。運動会では両チームとも2位になり、最後まで自分なりに楽しさを表現してくれた。</p>
	<p>☆『未来を支える食料生産』（社会） 発展授業として沖縄の水産業について</p> <p>○『古典芸能の世界』（国語） 発展授業として組踊について</p> <p>○社会見学【北谷の塩・ボクネ美術館・組踊鑑賞】</p> <p>○『版画』（図工） 木版画による裏手彩色の技法 ※エピソード⑨に記述</p>	<p>⑨ 沖縄をテーマに自由に表現を これまで学習してきた沖縄の学習を生かし、児童の好きな題材と彫り方で沖縄を版画に表現してもらいたいと考えていた。そこで、児童がイメージする『沖縄』を自由に表現することを学年で実施した。そこには、私たち学級の、児童が主体的に授業に参加する取組に理解を示して頂いていた。今回、下描き、彫り、色付けまで自由に表現するという名嘉睦稔さんの版画に共感し、ボクネ美術館に回り、インタビューを学年の先生方と共に先行準備してきた。A児は、沖縄調べで学習した海と龍が空を飛んでいる版画を作成した。初めての彫刻刀ということで時間はかかったが、周りの児童に助けられながら最後まで作品を完成させた。他の児童も各工程で、お互いの作品を見ながら「この彫り方がいいね」「この色の付け方教えて」というやり取りが多く見られた。「沖縄の人は気温と同じくらいあたたかいと知ったので、ポカポカした感じで作った」という沖縄の空や、「習い事に行く時や帰る時に見る」という夕日の海、「総合の学習をもとに平和になってほしいなと思って作った」という昔の沖縄の家、「社会科の水産業で学んだ海を思い浮かべて」と沖縄の海などがあり、児童がこれまでの学習や経験で学んだことから作成できた。</p>

## 6. 考察

### (1) 児童同士の関わり

エピソード①にあるような変容の裏には、A児に関わってくれる児童がいた。その児童は一人ではなく他の児童とともに協働して関わり、A児が変容してくると寄り添ってくれる児童が増えていった。特にB児はいつも声をかけ行動を共にしてくれた。B児に「たたかれたり、嫌なことがあったりすることはないの？」と聞いたところ、「みんなが、『A児はいや』と言って離れて行ってしまったらA児はかわいそう。だからおれは、たたかれてもちょっかいされても関わる」「だんだんあれがあいつの表現だと分かった」と答えた。A児はエピソード⑤にある学級の盛り上げ役をB児と一緒に今でも行っている。毎月末に行っている記述アンケートに『今月の伸び率No.1は？』という質問がある。5月6月の1位はA児が選ばれた。A児が目標の達成に向かって取り組んでいることが他の児童にも認められたといえる。それとともに学級からA児に対する不満

は少しずつ弱まっていった。11月頃にはA児は、清掃活動で「ぞうきん、おれがやるよ」と率先して仕事をやるようになり、係活動でも自分の決められた当番の日は自主的にできるようになった。10月と12月に行ったASSESSの結果では、「回答に矛盾や防衛的反応が見られ、結果が正確でない可能性がある」という記載が無くなり、生活満足感や自己肯定感が高まった結果になった。

学級の児童は当初、自分のことは棚に上げ注意だけを言う児童が多かった。しかしA児のエピソード①で要求をだしたところ逆に要求を突き出され、さらにエピソード④のあいさつ運動で逆に批判され、自分たちも変わらなければならぬ局面に出会い変化した。また学習班や生活班の班活動を常に行い、コミュニケーションを取りながら行動することでお互いが成長した。そうした中で児童は自己有用感を高め、エピソード②⑤⑦のように授業の中での関わりが良くなった。エピソード③のように児童の要求を全員で話し合い解決し、更にエピソード⑥のように主張を通し納得できるようになった。そしてエピソード⑧のように、自立した行動をとれるようになった。児童からは、やりたいことができ授業や学校が「楽しくなった」という回答が多かった。また、「協力することが多くなった」や「チームワークが良くなった」という回答も多くあった。学級の中で安心、所属、承認、自立が確立し、児童同士の信頼感が高まり、支持的風土が醸成したことが表れている。

### (2) 地域教材や地域の人との関わり

児童はエピソード②の実践で、インターネットや本などから調べることの限界を知り、その他の教科の授業においても「沖縄ではどうなのか」「私たちの住む地域ではどうなのか」という疑問を持つようになった。エピソード⑤では算数科で身近なことを授業の問題で活用したところ、児童は楽しかった授業の1つに挙げている。その理由として「身近なものだからわかりやすい」「想像しやすい」「生活に役立つかもしれない」「テンションが上がってやる気が出る」と答えた。エピソード⑦においては、インタビュー相手や見学したい場所を「紹介して」と相談しに来る班はなく、真剣に自ら探す様子が見られた。また児童自身で送迎などの協力を保護者に頼み、「先生、明日行ってきます」と見学を楽しみにしていた。ある班は、担任が事前に了承を得る前に保護者にお願ひし、自分たちで見学を行っていた班もあった。児童自身で相手先を考え、選んだからこそ意欲が高まり、主体的な活動になった。そしてエピソード⑨では、全員が版画で様々な沖縄を表現しつくりあげることができた。

地域教材を活用した教師のインタビューにもあったように、地域の教材を活用することは、学力差を感じずに授業に取り組むことができるのである。また地域の人と関わる授業をすることで、「コミュニケーション力」や「調べる力」「知識が身に付く」「活用力」だけではなく、「思いやりの力」がつくと児童は回答した。『他者』を意識し班のみんなで考えたからこそ、班の活動が主体的になり、支持的風土のある取り組みができた。

### (3) 学年の先生方との関わり

今回の実践を行うにあたり、私一人ではできないことが多くあった。学級経営は児童の実態に合わせて行うので、学級によって方法は違ってくるものである。しかし授業に関しては、次年度のことを考えるとなるべく歩調を合わせていく必要がある。今回、エピソード②の実践は本学級が先行して行ったが、児童の掲示した成果物から似たような取り組みを行ってくれた。A児に対しても、エピソード①のような児童の変容から「えらいね」「がんばっているね」と声をかけて頂いた。気になる児童を学年間で共通確認した成果である。児童が主体的に活動する教育実践を先生方は見てくれており、理解して頂いた中で、共同で教育活動を実践してくれた。外部講師の授業や社会見学の選定、エピソード⑨などがそうである。教師個々にも経験の差や得意不得意があり、全部を全く同じようにというのは難しいが、今回のような学年の取り組みが児童と教師の話しやすい環境を作り、良い影響を与えている。

クラスのみなさんほんとうにありがとうございます。みなさんのおかげで、6月4日今日なぐらないことを青にたっせいすることができました。特に、(B児さんのおかげでぼうりよくを少しづつなくすようになってぼくは楽しくすごしてきます。ぼくは、みなさんと(B児さん)にかんしゃをしています。

図5. A児の『お礼の手紙』



## 7. 支持的風土のある学級づくりに向けて

支持的風土のある学級づくりを、『他者』との関わりの多い班活動や地域教材を活用しながら実践してきた。支持的風土づくりの4つのポイント（安心、所属、承認、自立）は、班活動を実施することで確立する事はできる。しかし今回の実践から、教師からの一方的な発信だけではなく児童の要望や課題を聞き、教育活動全般において実践していくこと。そして、それが児童の身近な地域の教材ならより児童が主体的になり、自己有用感や自己肯定感が高まり、支持的風土を醸成していくことができる。

しかしすぐに自己有用感や自己肯定感が高まり、支持的風土が醸成していくのではない。学級にいる気になる児童を主役にし、全員で教育活動を共に歩んでいくことで成長していく児童もいるということがわかった。そして気になる児童の成長が見えたら次の気になる児童を主役にし、また全員で教育活動を共に歩んでいく。それを繰り返していくことが重要なのであろう。行きつ戻りつを繰り返しながら、自己肯定感や自己有用感、支持的風土は正のスパイラルで少しずつ高まっていく（図6）。だからすぐには獲得できるものではなく、時間をかけながら獲得していく。したがって、気になる児童を見つけた際には、学級が良い学級になるチャンスなのだ。

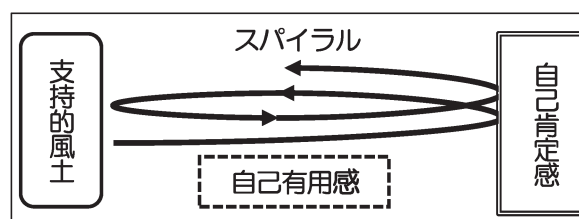


図6. 筆者が考える『支持的風土』『自己有用感』『自己肯定感』の関係

## 謝辞

「沖縄で地域教材を活用し実施した教師からの聞き取り調査」において、アンケート及びインタビューに協力して頂きました24名の先生方には心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 秋田喜代美, 2000, 『子どもをはぐくむ授業づくり』岩波書店.
- 池内悠英・岡本牧子, 2019, 「小学校におけるものづくりを通した支持的風土に関する研究」『琉球大学教職センター紀要』1:95-105.
- 国立教育政策研究所, 2015, 『生徒指導リーフ18「自尊感情」?それとも「自己有用感」?』.
- 宮城アケミ, 2001, 『沖縄発総合学習——山原船がきた海辺の町』民衆社.
- 中野譲, 2017, 『地域を生きる子どもと教師——「川の学び」がひらいた生き方と生活世界』高文研.
- 沖縄県教育委員会, 2009, 『「確かな学力の向上」支援プラン——「わかる授業をつくる」ためのヒント集』.
- 沖縄県教育委員会, 2013, 『わかる授業 Support Guide』.
- 沖縄県教育委員会, 2020, 『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトII——学びの質を高める授業改善・学校改善』.
- 沖縄県教育委員会, 2021, 『「問い」が生まれる授業サポートガイド』.
- 沖縄県教育庁義務教育課, 2020, 『不登校児童生徒への支援の手引き』.
- 沖縄県教育庁総務課, 2017, 『沖縄県教育振興基本計画 後期改訂版』.
- 沖縄八重山学びのゆいまーる研究会, 2018, 『学びとケアをつなぐ教育実践——自尊感情を育むカリキュラム・マネジメント』明石書店.
- 大和久勝・丹野清彦, 2014, 『はじめての学級づくりシリーズ1——班をつくろう』クリエイツかもがわ.
- 佐伯胖, 1995, 『「学ぶ」ということの意味』岩波書店.
- 竹内常一, 2016, 『新・生活指導の理論』高文研.